

ツキノヒカリドリ：学名【Giraluna piyon】

おそらくは古来より存在していたと思われるが、月光のある状況下でのみ、しかも実体には触れる事は不可、影でしか存在を顕にしないので長い間伝承の存在であった。月光に含まれるo因子との関連が研究されており、近い将来 専用カメラが開発されるとみられている。

ヒヨコのわき道

ほら、君もこっちに いらっしやい

第29回 絶対おすすめ。 世界三大奇書？

「奇書って何でしょう？」

今回は、巷では「生物学系の三大奇書」とも呼ばれることがある。三冊の本をご紹介します。いずれも原書は日本で書かれたものではなく、翻訳版で読めるものです。

奇書。なんて言われると、何かとんでもない仕掛けがある飛び出す絵本とか、変わった装丁がしてあるとか、とにかく見た目が奇妙な本なのかな？ などと思うかも知れません。

でも、見た目はごく普通の本です。開いてみても、別に妙なものが飛び出してきたりはしません。奇書と呼ばれる理由は、純粋にその内容にあるのです。

「アフターマン」

最初の一冊は、「アフターマン（原題：After Man: A Zoology of the Future）」です。

ドゥーガル・ディクソンと言う名のサイエンスライターが書いたもので、題名から想像できるように、人類が絶滅した後の5000万年後の地球を描いたものです。人類の影響で現代の大型動物も死に絶え、それでもわずかに生き残った動物達が、人類から開放された地球で、大陸移動による自然の気候変動のもと、どのように進化していくかを描いています。しかも、その様子を文章だけでなく、未来の動物達を美しいカラー図版で紹介していくという、未来の動物図鑑のような本です。

そこには、ネズミから進化した猟犬のような肉食獣や、ウサギから進化したシカのような動物、前脚だけで地上をのし歩く大型コウモリなどが描かれています。図版を見ると奇妙なだけの動物達ですが、その出現過程が進化論の枠組みで科学的・合理的に説明されていて、なるほど、5000万年後に本当にこんな動物が居るのかも知れないと納得させられます。この本は後にシリーズ化されており、環境破壊が極限に達した地球で、現代から500万年後まで、遺伝子操作の技術で人類が変化して生き抜いていく様子を描いた「マン・アフターマン」や、もし恐竜が絶滅しなかったら、現在の地球はどうなっているかを描いた「新恐竜」が出版されました。いずれも日本語版が存在します。

「平行植物」

「平行植物（原題：La botanica parallela）」は、幻想植物学とでも呼ばばいいのでしょうか？ 原書は立派な学術書の体裁で出版されたそうですが、内容はすべてフィクションです。この本はレオ・レオーニという、有名な絵本作家の著作です。

平行植物とは、「時空のあわいに棲み、ヒトの知覚を退ける植物群」とされます。はて、何の事やらさっぱりわからないと思いつきながら読んでみると、最初に植物学の発展の歴史が述べられ、平行植物の発見という事件、それらの解明に取り組む研究者達について語られています。またモノクロームですが、平行植物達の写真（イラスト）も多数添えられています。そこには、月の光の下に一瞬姿をあらわして消えてしまう巨大な花や、一度発見すると、どんなに近づいても見掛けの大きさが変わらない植物などが登場します。

これらは写真には写らず、手に触れると一瞬で崩壊するとされ、既存の植物学的研究手法を拒否しています。これらの植物をどう認識すればいいのか？ どう分類すればいいのか？ について議論され、それらの植物に関わる神話までが紹介されます。読み進んでいくと、この本は単なる幻想文学ではなく、人間がいかにして周囲や世界を認識しているのか？ 科学的観察・考察とは人間にとってどんな位置づけであるべきか？ という、哲学的な問いが込められていることに気付かされます。

また一方で、平行植物達に与えられた学名の語源を調べると、一種の言葉遊びが潜んでいて、とても魅力的に感じます。

「鼻行類」

最後に「鼻行類」を紹介します。この本の原題は Anatomie Et Biologie Des Rhinogrades で、著者はラルトシュテュンブケです。

鼻行類とはヒトと同じ哺乳類の一種とされ、周囲を海でかこまれて孤立した、南の海のハイアイアイ群島で独自に進化した小型の動物群とされています。

これらは日本語で「ハナアルキ」と紹介されます。ハナアルキとは、なんと鼻を地面につけて、鼻だけで逆立ちし、鼻の粘膜でカタツムリのように移動する動物なのです。

ハイアイアイ島で発見された、多種多様なハナアルキ達が図版と一緒に紹介されているのですが、それらが非常に奇妙な外見である反面、彼らの系統が進化論に沿って合理的に、破綻無く、非常にまじめに語られているため、まるで動物学の教科書か論文のようです。

原始的なムカシハナアルキ、地面に穴を掘って進むモグラハナアルキ、関節のある鼻で飛び跳ねるトビハナアルキ、プラナリアなどの三岐腸類の祖先となったコビトハナアルキ、複数の鼻でのし歩くマンモスハナアルキなどが登場します。

でも、この本は教科書・論文の体裁をとったまったくのフィクションで、著者も偽名なのです。本文には、積極的にフィクションであることを示す種明かしは示されていないため、下手をすると完全にだまされてしまうかも知れません。実際書店に行くと、しっかり動物学のコーナーに並んでいます。

それでもこの本の評価は高く、架空の動物を取り上げながら、生物の進化・適応放散を見事に説明した、本当に教科書にしてもいいような本なのです。

「一冊いかがですか？」

今回紹介したのは、いずれも「奇書」という表現では説明しきれない、魅力的な本です。私は学生のころ、これらの本に古書店で出会いました。現実の学術書や図鑑めいた装丁もこれらの本の魔法（演出）の一部。文庫版や電子書籍があったとしても、古い日本語版がお勧めです。

これらの本を実際に手に取り、じっくりと読んで、しばし夢を見るのはどうでしょう？

あなたも、南の海の群島で、逆立ちして歩くハナアルキを観察したり、人類のいない5000万年後の地球を旅したり、異空間に永遠にたたずむ植物達を目撃しませんか？

ハナアルキの鼻が歩くためにあると言うのなら、私たちの頭脳は、夢見るためにあると考えても、決して奇抜なことではないでしょう？

